



600
258

南總里見八犬傳第九輯卷之十六

東都 曲亭主人編次

第百十回 命令と傳て使臣征伐を正くせ
一葉を獻して窮士前愆と償ふ



再説大江親兵衛の夜半の鐘の响を聴く。今、解纜の好時候を先船公を
促さんとて、馳て遠く、みづうり立す。程、奥の二室、人ありて、登り大江氏等、
糸よりありと喚り、且、大家驚れ、且、訝りて、其方と齊一、ええ、ええ、と、
やう、推用、出て、来る。親兵衛、暗と定め、是れ、別人を、昨日、稻村殿よ
う命せられて、大士と招會の使、達け、蛸崎十一郎、照文、の、照文、の、日の、打、拾、を、玄色
縹紗、不、自家、の花、舞、あ、夾、衣、と、被、て、深、鐵、色、羊、絨、の、戰、袍、と、披、着、し、室、藍、聯、綾、の
野、袴、不、青、蓮、繭、紬、の、副、帶、と、締、添、朱、鞋、の、中、刀、と、佩、く、一、刀、を、左、の、引、提、り、俣、而

八犬傳九輯卷十六

文溪堂藏

徐あつ親ま兵衛へ們らの饒あ一まと揖讓あとまあ上あ坐あ着あるあ親あ兵衛あの席あと讓ありあ恭あくあ朝あひあ思あひあひあの死あ蛸あ崎あ主あ幾あの程あ不あ飲あの地あ不あ来あてあ那あ一あ室あ在あ一あ方あと向あへあ照あ文あ點あ頭あてあ然あばあとあ這あ回あ咱あ們あと與あ四あ郎あ分あ和あ殿あ並あ不あ七あ大あ士あと招あ會あの死あ使あ不あ達あれあてあ昨あ夕あ解あ纜あとまあけるあの既あ不あ靈あ狐あ政あ木あとまあらあんあ神あ通あ奇あ特あの忠あ告あよあうあてあをあ知あれあと疾あ听あたあれあ今あ中あ具あ不あ報あるあもあ及あ交あるあにあ却あ卑あ職あと與あ四あ郎あの昨あ夕あ台あ命あと稟あしあよりあ日あ没あ時あ侯あ子あ稻あ村あ益あ能あ出あ去あ向あをあ異あしあ相あ別あれあてあ各あ快あ船あふあらあ乘ありあてあ武あ藏あをあ投あてあ漕あ走あをあまあ昨あ夕あ風あ波あ暴あるあけあるあ而あ逆あ風あれあ幾あ番あ吹あ戻あれあ找あむあらあむあらあれあ思あひあわあらあ似あ志あ洋あ中あ夜あをあ明あしあ又あ時あをあ移あしあ今日あ夕あ晡あの左あ側あにあ辛あ考あてあ這あ兩あ河あの西あの岸あにあ漕あ着あけあ與あ四あ郎あへあらあんあ船あ異あれあ知あるあよりあもあ卑あ職あの昨あ夜あ通あ宵あ勅あ風あ洪あ波あの揺あ惱あまあれあてあ心あ神あ穩あるあるあ故あ不あ飲あ我あ船あの地あへあ着あくあ已あ前あよりあ頻ありあ頭あ痛あ眩あしあ權あ且あ堪あかあらあ豫あの船あと千あ住あ河あをあ漕あしあてあ穗あ北あの郷あにあ氷あ垣あの宿あ所あをあ問あ試あてあ大あ士あ在あ

處あをあ撈あらあんあ思あひあ不あれあと朽あ惜あくあ病あ着あるあよりあ果あをあ是あ非あるあ船あと歌あめあせあしあ這あ里あの屋あ主あの安あ房あ上あ總あへあ日あ毎あ六あ文あ加あ海あ船あの向あ丸あれあ我あをあ載あしあ高あ工あの母あ大あ累あと相あ識あしあ他あが坐あ席あと借ありあるあをあ一あ霎あ時あ將あ息あまあと高あ工あ們あの意あ見あ不あ儘あ相あ譚あてあ那あ奥あの編あ室あと借ありあるあ久あしあ臥あてあ在あの管あ工あ們あの暇あと取ありあ船あをあ戻あ返あ遣あしあ俱あにあ親あ兵あ一あ十あ名あと我あ私あの伴あ當あ們あの河あ原あの船あ見あ矮あ屋あ留あ置あてあ這あ身あのあ貯あ祿あの某あ腹あ衣あと被あるあ寝あるあもあ知あらあんあ目あ睡あまあしあ既あ不あしあ日あの暮あらあ有あ徳あ程あ不あ這あ一あ室あ不あ來あるあ三四あ個あの客あ中あてあ相あ譚あ不あ聲あ不あ眠ありあ覺あてあ心あもあらあんあ所あ一あ個あ大江あ和あ殿あの聲あ又あ一個あ扇あ谷あ家あの浮あ浪あ人あ河あ鯉あ氏あらあるあもあ余あれあ越あ後あの旅あ客あ師あ弟あ此あ彼あ似あるあ冤あ屈あの罪あ狀あ辛あ考あてあ免あれあ亡あ命あ流あ浪あの顛あ末あまであ詳あ不あ知あらあるあ世あの塞あ翁あが馬あをあ我あ船あ昨あ夕あ順あ風あをあらあ今日あ穗あ北あへあ赴あきあ和あ殿あ不あ逢あらあんあ逆あ風あよりあ病あ病あよりあ料あをあ這あ里あ日あをあ消あ去あ反あてあ君あ命あと修あ時あ宜あの終あしあ病あ苦あと忘あれあてあ生あ平あよりあ心あ地あ清あかあらあるあ

疾起そちたひ對面たいめんせず思おもひりり不ふああねねも各おのづから會あ話はのこと細こまきま言ことの果はるま程ほど不ふ倫りん
聞きく佳境けいきやう不ふ入いり河か鯉り氏しの必かならず死しの危あや難なきま救すくひらら靈れい狐こ政せい木ぼくがあ腹はら大おほ刀やいば自みづからみ変へ化か去さ
たる其頭そのあたまの奇談きだんへへゆゆ之件このことの政本せいほんが神通しんとうの素藤すとうが再叛またかへり也なり支し佐さと和殿わだん告つぐ
狐龍こりゆう化かりなり升天しょうてんの為ため又また這石龜このいも屋や師し弟ていの傳命でんめい奸夫けんぷ淫婦いんぷ不ふ死し復またかへりてなり萍流へいりゅう
ひくひくの地ち不ふ事じ且また御ご宗そう三さん觀くわん鼻び五ご十三じゅうさん太た素す心しん言ごんとと乱らん妨ぼうせせれなり始はじめ難な義ぎ
及および折をり和殿わだんが河か鯉り生せいと俱とも助すけ力りきまま立た地ち其その崇たか鬼おにを追お拂はらひなり事こと且また和殿わだんと茲こゝ不ふ順じゆん
風かぜをかぜ上うへ總そうへ推お渡わたり素藤すとう們らを討う滅めつて那あの前まへ言ことばを果はかんなり解あ纜かづないなり其その鯉り忠ちゆう武ぶ
畧りやく思おもひ支し皆みな意い表ひょう不ふ出で奇きく愛あい不ふ勝しょうの欽きん卒そつゆゆ館くわんの御ご証しやうを快か傳でんとと不ふ小せう
あろ喘あせれなり倉卒そうそつ小楮せうじゆ戸こと隔へく吸すけけるなり在あ礼らいとと叮てい寧ねい示しるなり懷なつよりなり主君しゆきんのこゝ
澤たく一通いつとう令しやう半はん扇せん子しの載のて卒そつと遞た與よ親おん兵衛べいゑの找た近ちか受う令しやうて兩りやう三さん番ばん
ろち戴たい汗あせ唇くちべ我君わがきみの御ご親命しんめい御ご向むか政本せいほん忠告ちゆうこと素藤すとう們らが再また度たびの叛かへり逆さか我君わがきみ

411

難

仁にを召めかり追お伐はの義ぎを課かせなり和殿わだん并なら焼雪やうせつとと使し使し不ふ達たつの事こと由よしを听きよなり
王わうの使し使し不ふ達たつの一日いちにちも不ふ妖あや賊ぞくを討う滅めつせなり我君わがきみの賢けん慮りよを休やすめなり思おもひなり不ふ小せう
アハ我わがが曾そ勇士ゆうしの本ほん性せい也なり已いになり征せい伐はつを決けつ意い似に識し者しやの
議論ぎろんを料りやう今宵こんせう使し使し不ふ達たつて素藤すとう征せい伐はつの君命きみめいを承うけなり易やすくなり車くるまを
先ま々々御書ごしよをし崩くづれなり左ひだり右みぎを披ひらきなり遠とほくなり身み起た緑ろく頬ほ浄水じやうすい盤ばんの柄へい松しょう
合あ抗かけなり幾番いくばん歎なげかり洗あいなり浄じやうめなり舊ふる席せきから多おほく懷なつかり主君しゆきんの澤たく令しやうて徐じゆ
封皮ふうひを折をりて聲こゑ爽すわ然ぜん不ふ讀よむ程ほど大おほ家け席せきを避さげなり謹こまになり齊いっ一いつを聽き聞きまなり書しよの曰いひ
諭ごん示し犬いぬ江親かちか兵衛べいゑ可か征せい伐はつ再また叛かへり妖あや賊ぞく墓ぼ田でん素藤すとう等ら事こと
右悔みぎのあや往むか時とき之の愆とが而して思おもひ今日けふ得え失し譬たと如ごと心こゝろ疑う則すなはち生な暗くら鬼おに患あや眼まなこ
者もの見み日ひ華は惑まど於を是こゝ爲なるなり甚おほ衛ゑ寡くわ人ひと謬まち而して不ふ悟さと妖あや賊ぞく素藤すとう等ら有あ
反間はんかん之の術じゆつ自みづから退ひ棄す股肱こたう而して復また有あ螳臂たうへい熊車くまぐるま之の孽わざはひ是以ゆゑ以もつ覃しん

八代傳乙冊卷十六

三

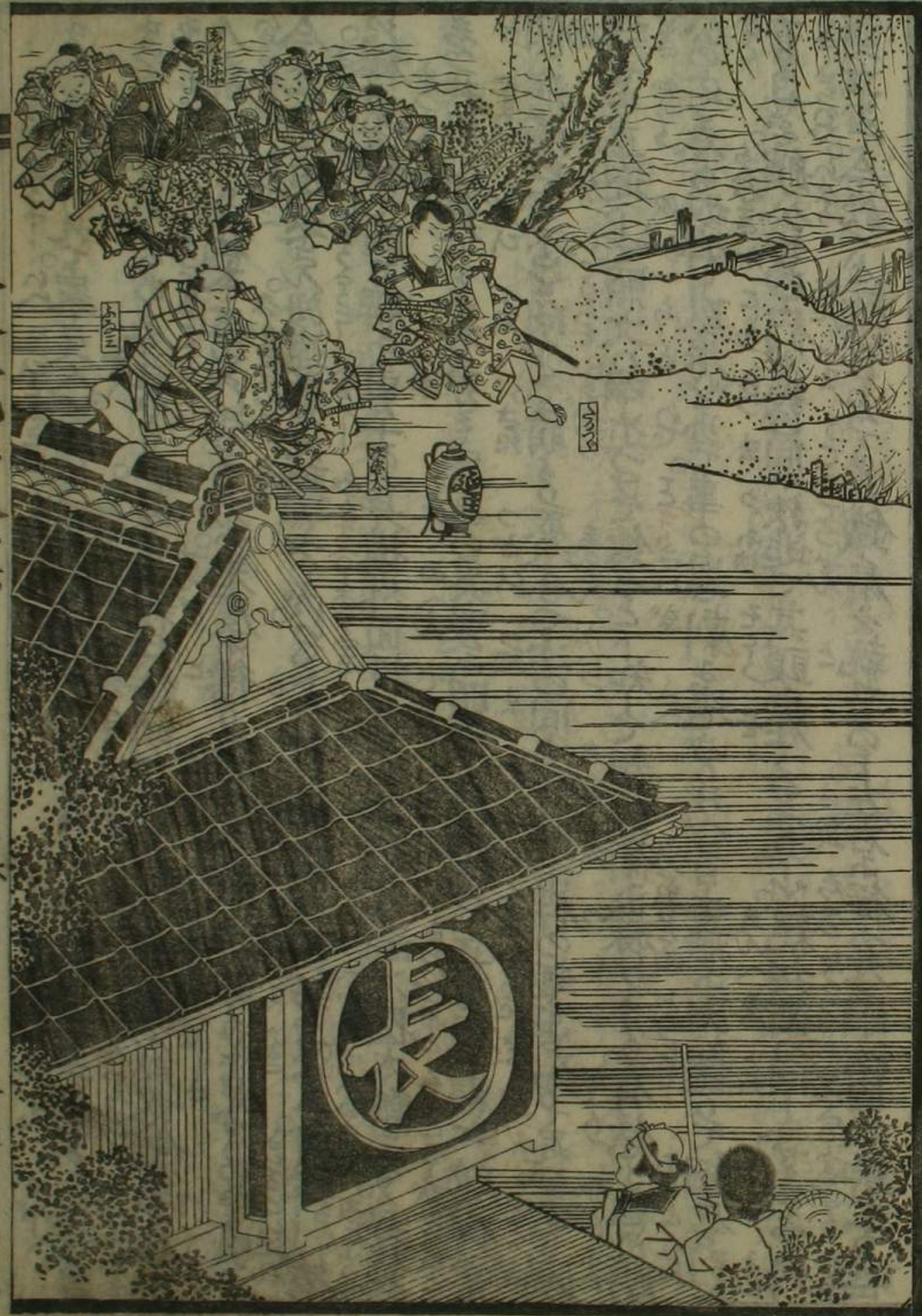
文英堂藏

重用斧鉞。非卿乃不可也。因賜以手書。書屆之日。亟歸寧。本藩且拂魔雲而明天罰。全前功以復舊職。寡人俟卿。一日猶如千秋。餘者有干異日。面談勿違。急急如律令。文明十五年夏四月十一日。義成。押。とぞ寫せのひけ。當下照文の親兵衛不歸參を祝ま。御詮恁地。今宵の解纜勿論。那妙椿の幻術。勢ひ先度と同。かゝる。單職。俱。來。け。究竟の親兵衛十名あり。他。和殿。お。ま。あ。せ。河。鯉。生。次。團。太。師。弟。と。俱。不。助。助。せ。る。べ。い。孝。嗣。膝。を。找。め。て。次。團。太。と。共。侶。不。照。文。初。對。面。の。致。ひ。と。舒。る。と。就。中。次。團。太。師。弟。三。照。文。が。執。成。り。討。隊。の。伴。を。饒。さ。る。時。耳。の。之。勇。氣。増。て。又。親。兵。衛。不。云。と。その。情。願。と。口。説。け。る。倍。り。一。程。不。親。兵。衛。の。主。君。の。澤。を。懷。へ。斂。め。照。文。に。答。る。を。御。詮。の。趣。乘。り。ぬ。縦。晚。生。一。人。と。も。征。伐。輒。る。べ。れ。ど。も。倘。妙。椿。を。走。ら。る。尊。と。送。来。似。う。次。團。太。

師弟の二も町人多と數小あり。急ぎ別後。意見を加えられ。然も。請の伴。但。和殿の親兵衛。素より。晚生一個の與。不。親。兵。衛。の。主。君。の。澤。を。懷。へ。斂。め。照。文。に。答。る。を。御。詮。の。趣。乘。り。ぬ。縦。晚。生。一。人。と。も。征。伐。輒。る。べ。れ。ど。も。倘。妙。椿。を。走。ら。る。尊。と。送。来。似。う。次。團。太。毛。不。晚。生。敢。身。以。ら。の。軍。功。を。貪。ん。と。欲。せ。荒。川。氏。不。謀。合。ま。餘。賊。を。漏。さ。と。思。ふ。不。在。の。親。兵。衛。二。人。を。借。り。一。人。を。も。足。ら。せ。れ。と。急。病。の。折。さ。る。代。り。不。便。な。殿。臺。の。陣。營。へ。次。團。太。師。弟。を。遣。し。密。議。を。達。せ。遮。莫。御。内。の。雜。兵。を。荒。川。翁。高。宗。逸。友。と。疑。ふ。其。期。と。行。つ。と。あ。る。是。より。外。不。所。要。る。敵。城。へ。不。及。び。て。河。鯉。石。龜。の。幫。助。あり。就。中。河。鯉。生。一。人。當。千。の。本。事。を。た。は。る。是。今。番。の。一。事。の。我。君。不。薦。め。る。一。方。の。杆。城。と。素。より。疑。ひ。る。是。の。這。ま。る。ろ。の。あ。う。と。照。文。點。頭。和。殿。の。萬。丈。不。神。々。を。凡。慮。不。測。知。り。か。げ。れ。開。け。左。も。右。も。意。見。不。依。る。河。鯉。生。の。一。も。如。此。の。忠。孝。拔。群。智。勇。也。然。と。と。查。せ。る。

は老侯の死時より卑職招賢の死使を奉りて。関の八州を履歴りて八武士の外は
も差せる。文武の英士も遇さる。料も今から忠孝智勇拔萃する。人の和
殿に従ふ。今番の役も功も卑職薦め稟さすも。必重用せらるべし。然るとは
錦の上の花を添ふ。當家の至宝何事も亦れ。優まは実公私の幸ひる。死と只
管小愛懼ぐを。孝嗣听々。愀然と羞る。頭を稍拾げて。あと思ひも。多た大江主
蚤崎生さ。分の過。褒賞の當り。か。現天道の盈ると。虧く。果せる。か。蕙
蘭敏系ら。と。秋風是。破の。忠臣仕。と。誣侮。を。覆せ。在下。定。不肖
る。孤忠と。盡して。容れ。不測の罪。刑餘の日。陰見。思へ。思へ。思へ。
盈ると。虧く。最。御。故主の賢明。諸第恩
顧の義も。他姓仕。故主の怒。惹。庶。畢
竟我身の。死時。政木狐。字育。今日。又。那靈狐。必死の命。極。前後の恩

義輕く。今。後名。行。陰德。慈善。旨。政木
狐。恥。今宵。河鯉。佐太郎。改。政木。大。全。名。告。下。政
木。則。他。德。生。涯。大。全。名。行。又。虧。大。江。主
蚤崎。主。の。意。查。親。兵。衛。十。一。郎。側。聞。次。園。太。及。卿。三。共。侶。賢
者。の。用。心。故。忠。信。美。感。又。這。條。の。物。譚。以。時。移。り。夏。の。夜。の。之
深。親。兵。衛。頻。々。焦。燥。既。迷。の。盡。風。好。ま。れ。親。兵。衛
快。船。と。大。家。立。て。浩。如。の。船。公。店。舗。の。方。も。走。り。來。て。親。兵。衛
們。報。る。刀。袷。連。の。嚙。昏。三。觀。鼻。之。五。三。天。們。閑。靜。を。あ。り。て。復
件。の。五。三。天。素。も。吉。の。地。方。名。高。任。俠。乾。見。乾。弟。多。甲。夜。の。選。恨。復
んと。飲。の。隊。約。莫。五。六。十。名。も。長。杖。船。竿。も。或。の。借。見。竹。槍。引。提。這。方
投。て。來。ぬ。目。今。悄。地。告。る。者。各。位。覺。期。の。前。也。是。非。及。及。小。可



長舟の舟長

六

舟長



いんさそてきち
五十二太素手吉
夜十川
船長の家を脅かす

舟長

舟長

其も側杖打れて家三人を損つて翠子の渡世の障りあるん快外面立をて樹々と和睦さ
 する免れあへるも益なきを嘆け親兵衛所々打笑ひて然るやん那奴們の幾百十
 人寄来とも我本事不知らん先度懲りぬ恩物の本性敵も不足るものなるも
 今立きて追返せん汝達教馬に騒ぐべしといふも野袴の袴細く交を刀緒引抜
 け釋見木楯で両刀腰の勇士の身構外面投て突んと其れが孝嗣次因太卿も身装
 考共侶の後れとて勇まざる事の変更照文も推續せ立要程親兵衛並伴當
 們の病病の安否と向んと前も取合て次の間在の既事件の趣を告知しれん毫も
 誤さ立迎へし照文の喉辺に口で息を吐くと下知と親兵衛の諷けり有徳一程の船
 公の宅着の奴婢も臥房を出て事の恩劇堪ざりけり皆土藏の因龍の細戸引
 音もせし船公高工們的幾の間逃して其頭在るをり親兵衛の問もせし各外
 面立きて今終くと敵もあつる鐵扇を執れるも左右の従ふ孝嗣次因太卿も器

千九
 千九
 千九

械され店前の柱の楯を捍棒を脇挾て寄せわんと身構る前後の附副影
 兵們のあつと握り持々各先と蒐んを準備の透間あるをけられ非如五十二天素
 多吉們が看ん涯りの伏家の盡して三方より推寄考とも輒く古と令んと亦あつる
 尺さきり公程の向水五十二天枝獨鉤素多吉の従ふ隊の破落戸と六十餘名相
 俱して敷垂とて推寄考の既り近つ隨鮮曉の月隈もきて白晝の似く明りけ
 る他他們が打扮紛ふも其身の漢戸町人なれも戰鬪の習俗を近所聞戦あ
 る毎小落人の武具を剥も多拾ひも各々貯されや鉦見身甲お身と探めりも小
 器械と執らぬるいと苛めりて見えりけ然る五十二天素多吉の親兵衛們が各々
 外に出る船の家と距ると五十歩許の程在の相従者始増て約莫二十許名を
 は勢ひの猛りけれ戦々々怯れり忽地已々と喚禁めて器械を伏せ頓頃巾を
 脱捐て大地お跪たけれ大家いづく地上お跪坐す謹と敬ふ者お似る親兵衛們のれを

見て必是説の計るべし。思へば毫も由断せ。他們が立つて寺程に忽地寄隊裏より七色草絨の身甲の間鐵打る細録子の臂縛躰繳きて二尺七八寸ある戰刀と九寸五分の匕首と帶る兩個の武士隊と離れ杖と出。親兵衛が身邊に恭まうち朝ひく。ある大江主恙もまき。逆時よひ。景能ふておのれと名生る親兵衛を訝りて晴と定めり。見れば定ぬる。是別人をも。衛高館山落城の折賊徒の團を殺脱く。往方も知れどと。番士の頭人田税戸賀九郎と。昔屋八郎と。親兵衛の欲む。勃然と聲高かり。汝達とて恥を知る。その身の番卒の頭人を奉りて館山の城と守り。賊徒のうちに覺ぎて。良干生拘れ。士卒と。數もとも。共侶の戰殺。要せ。辛く命を免れて。萍流ひ。這頭。在。欽。判。河邊の破落戸の隊。入。の氣。使。良。民。旅。人。を。殘。害。を。僅。口。と。餉。ふ。を。あ。ん。ん。ん。あ。ん。忠。義。兩。を。虧。う。烏。許。の。白。人。の。公。子。あ。ん。ん。何。を。あ。ん。ん。死。疾。退。て。皆。

一列の銳も鈍も鋒頭も衝揃来て勝負と決せよ。今や躊躇ふらと思ひの隨小責罵る。逆時と景能の听々敢争つ。俱れ徐に寛解て。喃大江王言一。早は如右思る。只。宿。小。依。れ。る。ん。在。下。們。不。似。と。い。へ。も。只。顧。命。を。惜。む。の。與。小。城。を。奪。來。て。阿。容。々。と。脱。れ。去。る。者。あ。ん。ん。や。城。を。預。り。ま。り。日。も。守。る。小。由。断。る。の。か。賊。徒。の。不。測。の。幻。術。を。も。て。う。ち。入。る。ま。り。形。體。を。せ。ま。況。そ。の。勢。幾。十。を。や。錐。を。立。た。地。も。ろ。り。一。矢。射。れ。も。物。も。せ。ま。の。故。は。御。方。の。士。卒。或。は。落。亡。或。は。數。れ。て。防。ぐ。べ。し。も。あ。ら。り。け。れ。在。下。們。相。謀。り。て。恥。を。忍。び。命。を。免。れ。俱。れ。他。御。を。走。り。し。異。日。素。藤。征。伐。の。御。用。中。達。て。前。行。と。償。ん。と。思。へ。ん。小。這。兩。國。河。原。を。五。十。三。太。素。も。吉。弟。兄。の。逆。時。と。其。舊。縁。あ。れ。他。們。が。宿。所。に。寓。居。も。御。京。落。亡。た。後。御。方。の。士。卒。い。ろ。ろ。り。凡。逢。ふ。り。を。便。直。と。旋。ら。し。賊。徒。を。伐。り。會。稽。首。の。恥。を。雪。ん。と。欲。ま。る。五。十。三。太。が。乾。兒。們。の。都。て。市。中。の。生。俠。客。を。軍。旅。の。事。に。孰。され。衆。

予らとも馮心一々を思不誤一今日黄昏小三觀鼻中旅經紀の
よる五十二天們が理不盡の聞諍ひを考ひて餘怒和殿及び和殿怒り堪玉
矢場の五十二太素多吉と左右の抗と投石合せて河の擲ちある時安房の里見の
御内人大江親兵衛仁るると名告られよる皆駭怕れて逃て五十二天が宿所聚
合ぬ然ても和殿の武勇力量の和漢の類稀多りと豫より我們が五十二天弟兄隊下
者も折々噂をり一他們の和殿の撞見多る本事故の古と掉と逃還り一折悠々
と我們の告るに登時在下們思ふ大江氏自餘の七武士と招會の與遊歴の暇と賜ひ
ぬと穿るは這頭を徘徊あると必是所以ありて來歴の傍ら一時宜より素藤對
治の夙志と告て一臂の助力を頼むと思謀れる意告と五十二天素多吉弟兄の它者
每も解示して和殿の歇店と悄悄地の尋ね申夜より五十二天素多吉と那裏の奥庭の悄
入して事の動靜を偷聞させし政木狐の忠告告て素藤が館山城を龍衣畧り一と

再叛の爲体を和殿駭して知りて然る今昔水路より那地ありて素藤の一個も漏れ謀
伐せし茲小解纜の順風を專ら一路兒們と密談の事一願末並河鯉氏と石島屋
師弟の事の大畧と尋ねる五十二天且宿所から來て那裏で所る夏の趣筒様々と報
去る我們兩個怡悦堪る時を失つ孰の日より宿志と遂に和殿對面あり
驥尾の幫助を頼むと思ふと然る寸功を左も右も思惟る五十二天素多吉の候
戸を近御隣國都會の地折々鮮魚を推送る快船西之艘と持り且他兄弟乾
兒們的渡海の快船と漕孰と風好すの音と十數里の波上より一時歎一時半漕
走ると易くといふ然らば船も和殿の上總へ送ると我們も亦同船共明日早
天の那地に到ん疾る準備せよかと急し船を救る五十二天が乾見の中船を遠早く
漕ぐ者復然らば今番の伴立那館山の城攻の幫助を願ひし信
折々素多吉の蟹崎氏の憶りて同歇店來會を則館の御澤を和殿の逸

樂一多まの。河鯉氏に改名して政木大金と名告る事。次因太師弟の願ひもく軍旅
 俘を鏡される事由き所果て走らかりの末に然るが急げと宿野を去り齊一推参侍
 ぬ。めき海客を多く相伴れ一期の面目の上より答を喃登崎主の使の威徳もて
 けり執成ぬねと逆時只管も勸解れ景能も亦語を續て果敢る逆道口説き
 五十二太と素も吉們の久し地上平伏す頭を拾ひて親兵衛を瞻仰り又額を衝か
 ざる陳さす。小可們眼あり富士も筑波も知る。流鬚を掖り後悔至極願ふ
 廿廿心の。鏡さぬか。目今古屋田税の両大人の氣如く小可毎々快船の俗あり
 鯨舟の船毎船八挺建て風逆に波を断る勢ひ玉の涙を像く走る極て早
 開を四艘艦一。廻きと這里の河岸に在り一艘の十餘名或は二名と乗せ。我
 兒伴仕へ天明の程那便路を浦邊に寄せと難く。然るに這里の船公船毎
 皆九席の海船を頼風を便り走るも亦遅ら。是等の利鈍を亮查むる思

意不儘さをゆひと送依りかき意を演で直実歸服の誠心都て言語見れと側聞さ
 照文の杖を親兵衛の手に掲ぎ。喃大江王卑職這回。兩館の使をれと。敢助
 言とあわねと。逆時景能の情願も及五十二太素も吉と。請ふ趣も理
 あり。然の思ひぬ。この親兵衛點頭てその愚意と相似。田税苦屋のりも死
 去死所死せり。一旦論せり。又存命て做さ事。前の怒と憤も足ん。晩生一個軍
 功。食んと拒ん。分説る故さあね。同船を鏡生。這里の船公管高工。那地
 けん影も。五十二太素も吉們が請ふ儘と。他們が船を用ん。勿論ぬ。館山の俱
 去か。何と。安房上總下總。棧て千餘城を管領。大諸侯の沙汰と。終
 一郡一城の妖賊素藤們を討ぬ。余漢戸破落戸。軍陣も。明日館山。敵を攻る。その義
 非如軍功あり。世の胡慮も。今宵船を獻する。明日館山。敵を攻る。その義
 異るべし。佐佐木五十二太素も吉們の船を便宜の浦に敷糸。一人の舟を館山

城破れ。網と漏れ。殘黨の末。津を求る。あつ捕捕て獻ま。然そ一人も殺さず。那
 城内の兇徒の外。夷瀆の良民も駈入れて。己の志に従ふ。あつる。彼を殺さ。不便なる。今
 殿臺を陣營の討隊の大將荒川清澄。小森高宗。田税逸友。們と俱ふ。千數百騎を
 従て。敵を厭えて。戦さ。志を挫かれ。御方の陣營。謀合を内外より。攻め全勝なる。か
 べ。田税苦屋の。人々。あつる。五十三太。素吉。們の。意を。得て。共軍令を守ら。折言の
 俱して。その。船。無ん。然。此。里。天を。明。ま。伴。る。答。を。听。ん。甚。麻。を。と
 理り。切。る。仁。者。の。指。圖。誰。も。一。個。も。推。辞。を。就。中。送。時。景。能。の。歡。び。更。て。親。兵。衛。の。礼。を
 做。し。孝。嗣。と。次。國。太。師。弟。の。名。告。ま。れ。又。五。十三。太。と。素。吉。們。も。下。知。し。兼。持。言。ひ。て。做。て。乾
 兒。乾。弟。の。儀。を。照。文。亦。欽。ひ。て。思。ひ。程。の。鐘。の。聲。淺。草。の。方。か。つ。る。を
 傳。ま。る。四。更。の。親。兵。衛。天。を。瞻。仰。て。這。夜。の。月。の。曉。五。更。未。だ。天。明。て。我。船。上。懸。着。る。
 進。退。極。て。不。便。な。大。家。船。無。事。と。あ。つ。る。照。文。別。を。告。て。事。執。る。親。兵。二。名。と。借。を

丈

い。照。文。異。議。を。く。の。意。不。儘。く。究。竟。を。兩。個。の。親。兵。と。擇。て。親。兵。衛。の。諫。け。の。介。程。の
 大。江。親。兵。衛。の。逸。時。景。能。孝。嗣。次。國。太。師。之。と。兩。個。の。親。兵。を。送。て。水。際。の。船。上。乗。る。程。に
 照。文。は。残。れ。る。親。兵。と。伴。當。り。前。後。不。立。馬。頭。上。の。表。を。送。て。親。兵。衛。を。喚。留。大。江。主。舟
 職。も。同。船。上。て。本。國。を。罷。り。館。の。段。を。上。り。思。ふ。も。大。法。師。の。法。定。不。御。代。意。を
 兼。た。れ。去。向。を。を。空。を。の。ま。り。及。び。歸。藩。の。折。大。功。の。秋。を。書。下。し。を。親。兵。衛。を。も
 する。勿。論。の。か。和。殿。倘。我。義。兄。弟。再。會。の。日。も。あ。れ。上。と。始。り。詳。お。告。め。ね。甲。夜。よ
 久。く。船。上。坐。席。を。借。り。お。及。て。要。る。席。料。は。程。心。囑。ま。あ。れ。の。か。火。急。の。別
 路。逸。時。景。能。孝。嗣。も。又。次。國。太。師。の。親。之。も。皆。照。文。を。向。て。別。を。告。る。を。程。五。十三。太。と
 素。吉。も。吉。第一。番。の。快。船。小。舟。内。を。親。兵。衛。の。同。伴。五。名。親。兵。二。名。と。俱。ふ。内。り。と。兼。移
 して。二。間。小。程。よ。坐。占。れ。は。皆。同。五。十三。太。素。吉。們。水。練。達。者。の。杜。校。八。名。八。艘。船。を
 建。列。て。左。右。別。を。漕。出。を。聲。勇。多。艘。拍。子。も。揃。り。月。の。都。鳥。墨。田。河。原。を。背。か。て。入

江不續く澳津波揺るもれゆく程小自餘の伴船西三艘又五十二太が伏家の杜伎
或八十名二千名打乗々々艦を轉りて漕連なる武夫の數多る身も信頼のあき
る世にも東弓引潮早追ひ風疾工死前像く彼御の看張詰く波回隠ま
歎水底のよとそれの瞬間小影さあささるりかけり。

第百二十回 天資神祐石門窄戸と磨く
大江親兵衛魔と破り賊と美く

公程の這夜親兵衛們が乗る快船中の快船も管工も覚あ者毎多小猶姫
神擁護の眼尾を回しあひん然る狐龍の真助を欲ち走る前似く天飛鳥鳥
も速るけれも船内穩るれ地上坐ま不異る然の戦飯の酒館をさす五十
三天素小吉準備あり札身申掩膊脛衣短槍も都て人數合七執容さけま
逸時景能るるで親兵衛並孝嗣次因太卿三們分ち與て軍装と整ま照

書

文而個の野兵ハ豫の準備あれ支送る隈りけり却説の曉天の船の上總の夷滿
身館山程遠く及便宜の浦浦漕着ま五十二日月既お没りて天の明ると思ふ時侯
親兵衛ハ船小五十二太と素小吉們的管工八名を儘に下留せ大家廣真遠不
ら登る高個の野兵ハ當初夷滿の莊客さけれ這頭ハ熟路と云親兵衛
それらちての野兵們を先立立磯山重は捷徑より連り路次といふあら夏の
夜は明る早くと館山近く来られ既なく和明る有悠り程親兵衛の船
中老寫りし書翰と西個の野兵不遠與ては連ハ殿臺を御方の陣營不赴
此の書の荒川氏不遠まへ却口杖ハ箇様休らんと密議と具記をまを野兵們
ある果て別れ殿臺いさける是より親兵衛の逸時景能孝嗣次因太
卿三と共都々六名悄々不館山を城の副門を穿ける程天ハ既不明れも後不
思ひ合ま伏姫神の真助る朝露深く起籠る高野干舌鳥夜不似



八犬傳九輝卷十六

十五

○文彦堂藏



八犬傳九輝卷十六

雲間よりさるる隊の頭人平田張金作與久と奥利本膳は良干友勝
權勇と先立る賊兵を失場四五名突伏せて良干の金作と友勝と本膳と
鏡を合ら戦ふ程本膳の友勝は腰に刺れて忽地の聲居居と程一も
良干の亦金作を突伏ける。這両勇士の鎗尖は残る賊兵五六名退んと先良干後
寄隊も進んたるも略もるはれ。大家地上に降人ありける。然良干友勝の
這賊兵も吩咐。尚羊死羊生る。金作本膳も横と牽き先推立
は。賊は逆時景能們と二隊も做ら。告る。景能逆時勢ひて和殿們的。始
下。これらふあわぬ。眼と。一。幸多かると相祝。俱賊徒を攻伐。介程
礪時願八浅木碗九郎奥利狼之众們の思ひ。大江親兵衛が一隊の士卒
従へ。襲ふ。城。入。呼る。聲。驚。慌。て。武具。固。め。朝。露。深。く。尚
圍。れ。敵。と。絶。ふ。五。六。名。る。べ。い。知。る。も。事。の。周。章。さ。ぐ。も。あ。ら。然。る。賊。徒。の

大江の二字より。胆落。防戦。思。擬。勢。は。け。只。活。路。を。求。る。與。同。士
數。と。く。疵。の。或。城。内。に。入。れ。る。夷。瀆。の。良。民。生。拘。れ。寄。隊。へ。牽。き。者。も。多
く。負。残。る。賊。兵。們。へ。兼。ん。思。堀。を。向。上。て。命。を。免。れ。ん。と。欲。す。者。の。多。う。介。程
殿。臺。の。寄。隊。の。陣。營。荒。川。兵。庫。助。清。澄。並。小。森。但。一。郎。高。宗。田。税。力。助。友
們。の。朝。憶。り。も。大江。親。兵。衛。が。謀。状。を。大。か。る。を。時。を。移。さ。士。卒。を。率。す。
館。山。推。寄。の。程。が。忽。地。敵。の。城。内。の。火。光。發。り。煙。中。天。が。沖。り。如。清。澄。と。を。相。て。原
來。大江。親。兵。衛。們。既。に。城。内。に。入。り。暗。霧。の。煙。を。賜。る。兵。每。續。け。と。隨。一。千。餘
騎。を。二。隊。分。ち。正。門。へ。清。澄。友。七。百。餘。騎。を。推。寄。也。又。副。門。へ。小。森。高。宗。と。大。將
を。五。六。百。の。還。兵。を。授。て。同。時。の。攻。伐。に。勢。以。宛。脱。免。の。像。を。馬。を。走。り。塵。埃。を。蹴。起。す
多。く。折。り。城。内。の。賊。兵。們。へ。徒。大。類。崩。立。或。正。門。或。副。門。便。宜。儘。し。城。戸。を。開
て。脱。れ。去。ん。と。外。面。の。攻。寄。寄。隊。の。軍。兵。の。聲。を。賜。前。を。垂。て。透。間。の。の

和

三

あつむ煙這方へ吹靡る秋衆人噪ぐ聲聳まき。意ふ寄隊お籠れて攻破らるるわわわ
んぞめをなみと喚覚む素藤岸破と身と起してその安らぬあま久く敵の
寄せされば火と放られ秋あつむ失をまのてんといひや堂拍鳴りて誰う在疾
まよと喚よの心なむ心ゆく焦燥て遠く枕方る腰刀と搔合て身と起えんせ
程小階子と登り来者者の素藤を聲被て其首へ来ぬの誰をよと問詞のりま
果ぬ程の屏風を托地と推開くとこれい人るる大江親兵衛をのれ素藤吐
嗟と駭怕れて逃躲れんと欲されども外面皆縁頼も欄干高く連りえは縦一時小戸
障子と蹴放りてその翅を身の脱れ果て路の柄をこけ掛て寄せ研んと疾視
たり又妙椿の親兵衛と見しより横の頭を被ぞ。侍場の野鶏の草小隠れ影を驚鳥東
鮎の涼おの意とる異るる戦く随錦綉の夜被の脊筋波打つ生死の海あ鳥の吻
あぬ阿瞞の身されど名號の六字のまを九字の印を断りて珠數後術を縮むか

ての脚を離るる穴欲しと思ふ。曾の機関糸絶て拵りもるる親兵衛介と
そと冷笑いてを素藤を忘れ秋裏の團主の仁慈と若れを思敵の折我亦以
後と箴めて尚復叛くとあつむ人さ借を我身單ぞ。誅戮ま下と期と推るるを
甘んじ美らさう那妖尼奴の哄誘され再叛忤逆の小利を以て城の據ると絶は十餘日天
罰踵を旋まき今又我を捉ふる。あつむ招て悪報の速きと思ふ。吾を妖僧奴。這
里半若れ老狸の精とて非理の怨お邪術と憑き。反間の幻術魔風の咒法。聊驗
あつむ。我明君と曇りて謀りて我を遠離まら。一旦寄隊を撃破りて衆を
功あつむ。思ひ誇りて夢の間や。靈王を我身小復らぬ若れ不測の邪術とて賢君
虞臣と欺たると我靈王と欺たると今も我敵せんや。人畜を差あつむ。若れ皆
人面獸心假の形貌と装ふ。頭顱既をこの這那共覚期とま。と詞激し
罵れ素藤怀念を抜敷る。向臍研んと閃るる刃を親兵衛踏落と。逃んとけは



八天傳九陣卷下

二十

女溪堂藏



八天傳九陣卷下

二十

中。その碗九郎と喚ぶ賊の頭人の大江王に伴れる。孝嗣主の敷かれある人那人を
 始より好敵するも斬棄れし。首級を捕るるより一少可る惜く思ひて。あふたの賊
 徒の首級の後の標識せん。與ふ。卿三の吩咐て片耳と。然し。ひびた。素ねあつ。分明あらんと
 公と清澄ら。听て。その用心と。嘆賞する。隨即雜兵。幾名。於下知して。伴の耳。首級。成
 索ひて。り。來よと。遣ら。却。次。園。太。孝。嗣。が。來。歷。生。素。生。と。問ひ。が。次。園。太。親。兵。衛。の
 听。方。趣。箇。様。々。と。政。本。狐。の。の。ま。も。の。崖。略。と。報。る。を。清。澄。の。之。感。嘆。して。あ。ら。ん。と
 那人の定ふ。義士之勇者。不徳多る。故主の與ふ。功名。と。食。ら。げ。ん。今。の。世。の。日。易。く。ら
 ぞ。因。て。お。り。お。汝。達。も。大江。は。由。縁。あ。る。と。公。と。逸。時。景。能。の。等。々。恥。る。面。色。也。御。水。路。を
 來。る。折。親。兵。衛。の。解。示。され。他。們。師。弟。の。義。俠。の。顛。未。及。五。三。太。素。も。吉。が。る。身。來
 路。徳。々。と。告。て。先。非。と。ら。倍。話。れ。又。友。勝。と。良。干。の。不。思。議。の。獄。舎。と。脱。出。る。兵。火。の。奇
 特。を。訴。る。異。聞。は。清。澄。駭。嘆。して。和。殿。兩。個。の。の。先。と。極。出。さん。と思。ひ。々。來。け。ぬ。

み。ろ。ろ。を。獄。舎。と。出。り。必。是。伏。姫。神。の。真。助。と。疑。ひ。る。備。志。を。破。ら。ず。幸。ひ。と
 わ。き。と。和。殿。們。の。獄。舎。と。共。灰。燼。ま。る。べ。ん。今。も。思。へ。御。方。の。得。失。皆。是。神。慮。に。依。る
 の。然。然。と。苦。辱。田。税。の。前。行。心。も。今。番。の。軍。功。鮮。小。お。ら。ぬ。僧。の。足。也。又。這。次。園。太。卿。三。の。是
 北。越。の。市。人。も。義。俠。の。南。弥。六。出。來。人。と。伯。仲。を。況。大。士。の。縁。あり。功。あり。異。日。恩。賞。さ。る。と。公
 と。慰。め。ら。れ。て。次。園。太。師。弟。が。不。勝。の。歎。ひ。へ。り。之。然。に。逸。時。景。能。も。又。友。勝。も。良。干。も。面。を
 起。ま。心。地。を。本。意。ある。言。を。思。ひ。け。有。徳。一。程。の。雜。兵。們。の。耳。と。斂。れ。賊。徒。の。首。と。示。て
 十四。五。級。の。て。ま。る。躬。て。実。檢。入。れ。け。ん。孰。も。名。ある。兇。黨。も。果。と。碗。九。郎。の。首。級。も。并。が
 中。に。在。り。何。人。の。所。為。を。見。燒。殘。る。る。築。垣。の。重。牆。の。青。竹。を。左。の。耳。より。右。の。耳。まで。刺。串。て
 在。り。清。澄。憶。ひ。を。嗟。嘆。して。這。淺。木。碗。九。郎。嘉。嘉。俱。の。故。城。主。小。鞠。谷。如。滿。が。譜。第。の
 家。臣。を。け。る。主。如。滿。が。素。藤。の。謀。ら。れ。て。終。を。截。逆。の。命。り。折。與。利。本。膳。們。と。共。侶。の
 雙。言。の。降。り。と。恥。と。せ。を。媚。を。獻。一。逆。を。負。け。て。重。用。せ。れ。惡。報。觀。面。を。死。不。至。と。竹。槍。に

刑不給一は眞四訓あり。是天誅ありと。公の大家有理と悟り。俱の嘆息あり。浩
然。這城内の良民の折をゆると相欽して。或の部と兵火をうち滅し。或の落る賊徒を
捉へて。寄隊へ献き。生口の中。素藤が囚牢司。海松。其軻遇八と。多の獄卒七八名あり。
正清澄。隨即軻遇八を牽き。さぐと。御小野幕。野幕。又名幕。小作。あやかん。と云。
六が首級。不代。事情。尋問。軻遇八。答。然。小可。故城主。小鞠谷。如。満。時。仕
たる。囚牢。預。で。い。ひ。基。田。が。曆。立。ま。及。び。て。勢。以。仕。ま。さ。る。然。も。職。分。卑。く。て。性。も。亦。愚。ま
る。那。人。の。兇。暴。本。者。侵。干。り。さ。る。ゆ。ひ。に。常。小。冤。屈。の。罪。囚。を。惜。地。に。憐。み。ひ。ひ。往。日。南。弥
六。が。首。の。靈。魂。あ。り。れ。後。の。祟。の。害。怕。し。ま。回。貌。聊。相。似。る。躬。方。の。戦。殺。兒。沙。雁。太。の。首。を
り。て。代。ひ。ひ。一。國。王。の。え。ん。為。と。思。ひ。も。ひ。ひ。ま。ま。よ。り。基。田。を。辰。す。く。思。徳。も。ゆ。ひ。ひ。只。那。死。靈。成
鎮。ん。與。南。弥。六。が。首。一。も。惜。地。に。獄。舎。の。北。方。悠。々。の。地。に。埋。葬。を。表。小。松。と。裁。ひ。ひ。備
疑。多。く。思。召。さ。ひ。並。設。て。亦。肉。せ。相。違。あ。ら。う。も。い。ひ。ひ。と。い。へ。故。老。の。莊。客。們。も。為。よ。清。澄。を。告。る。や。

墓田が跋扈をより。罪を民を虐は捕へて獄舎に敷糸と云。軻遇八。情地に憐
愍。で。悠。々。と。緩。く。あ。ひ。ひ。た。と。の。を。友。勝。良。干。し。然。と。応。て。共。侶。は。清。澄。を。報。る。や。這。軻。遇
八。の。身。比。素。藤。們。を。赦。免。の。折。舊。職。を。復。さ。れ。小。素。藤。が。又。叛。て。重。て。這。城。に。據。る。不
及。び。て。亦。逆。賊。の。徒。で。順。逆。向。背。の。理。を。知。ら。最。愚。魯。る。者。な。れ。も。天。性。婦。人。の。仁。あ
り。て。よ。く。罪。囚。と。憐。み。さ。る。も。あ。我。們。獄。舎。に。在。り。甘。し。思。ひ。所。へ。と。い。ひ。清。澄。點。頭。て。現
軻。遇。八。が。る。を。所。御。方。の。與。せ。され。も。御。向。南。弥。六。が。首。級。と。瘞。め。良。民。並。和。殿。們。に。慘
く。當。ら。し。め。り。殊。勝。の。事。に。獄。卒。們。も。共。侶。の。頭。項。を。續。き。お。し。せ。ん。と。て。綁。縛。の。索。を。解
き。罷。立。ね。と。饒。れて。軻。遇。八。と。獄。卒。と。俱。し。額。を。衝。れ。欽。ひ。兼。ら。ら。連。立。て。退。り。し。る。
軻。遇。八。が。の。下。の。話。を。是。より。先。の。清。澄。們。の。親。兵。衛。が。又。素。藤。と。生。拘。り。と。知
り。て。執。ひ。お。ち。て。對。面。し。た。先。殘。黨。を。追。伐。し。七。城。内。栗。平。定。を。け。れ。士。卒。の。四。門。を。成。り
き。親。兵。衛。を。な。り。し。時。移。る。ま。で。來。去。今。も。る。月。書。院。の。庭。に。在。り。と。い。ひ。あ。り。を。

清澄即便高宗逸友逸時景能友勝良于們的六勇士と俱に次因太卿伝を従
へ。みづら其果不封。親兵衛と對面。且孝嗣が功を賞して妖賊伏誅の勢を舒ると
も當下清澄が命をうけ大江主前言違ひを命ず玉成と旋りて復素藤と生拘りぬ
去武術勇畧今昔を雙獨素藤のまゝに賊徒を送り討捕せしめしむ思
老々聊画と起す。似る皆是和殿の賜の。宣は智まじり。この親兵衛と申す。晩生
何もの徳あり。然る褒賞預らぬ。妖賊一時を夷はれぬ。當節の御盛徳并に賢者
諸勇臣の寛く守り功を急ぐ事あり。及ぶ。那見ぬ。素藤の晩生樓より投降
を政木生と捕捕し。又那妖尼妙椿の我靈玉の光を撲れて樓より滾落し。那地
を脱けんと。多る由備那奴と走り。又妖辭を送り。おせん。思ふ心の安んず。わ。親兵衛
吟て政木生と共保庭面を幾番吹漏を限り。涉獵去程の憶も時移りて和者
對面遲滞及びぬ。多る由備那奴と走り。又妖辭を送り。おせん。思ふ心の安んず。わ。親兵衛

は。崖下の大蛇を。石の淨盤ある。指し示す。那妖尼奴の樓より是の内へ陥り。死
きて本形と見ぬ。底深けれ。心屬る。樹の蔭草の裡に。幾番と。素藤の可
惜暇と費して。方僅憶の。見ぬ。遠く。淨盤の頭を立て。て
さ入れ。項を抗して。引提せ。大家に。うち見れぬ。最大なる牝狸の既死。う。あ。有
ける。事の奇怪。是の。背の毛。焦縮れて。模様。壁言。焼画の像。如是。玄田生
發菩提心。と。八箇字の。見れぬ。鮮明。讀れぬ。人人。誦る。開。中。親兵衛も亦。這八
字。と。筆。見る。然る。教馬。氣色。清澄。向。晩生。昨。日。野の
原。政木。老媪。の。件。の。妖尼。妙椿。の。八房。の。犬。を。安房。の。富山。の。牝
狸。と。那。毒。婦。玉。梓。が。餘。怨。の。身。を。残。り。て。國王。御。父子。を。恨。ま。り。て。素。藤。と。哄
誘。遂。に。兩。度。の。兵。乱。と。起。り。て。今日。至。る。故。箇。様。と。那。玉。梓。が。怨。火。昔。年
八房の犬と俱に役行者の利益を既解脫せしむ。當初這裡兒も黄縁を他

ひまをせしむる。親兵衛満面をら笑れ。然る今番も亦神と人の資助をゆるる
 と。顧賞讃をうけ。この城内を昔より人の知らぬ活路あり。と政木老嫗が告げて。情ひ入るる
 を。折地道の石を立地。辟た大奇事あり。その靈玉の神助。給と云。恰との事。毎お君
 侯御父子の御洪福に依れる。素藤既に捕捕れて。妙椿も亦かる如く。あれ。晩生が仰受
 たる。椿事の果たる。明日未明に立去りて。自餘の太古在外を。素ねて。送る。俱とかり。来てん
 と。清澄は。あま開く。亦太く。性急。和殿今番。大功あり。館。見参。入。れ。幸。と。那地。と
 て。遣。れ。れ。先。素。藤。們。林。獄。を。尋。然。黨。を。捕。捉。入。り。て。這。方。来。り。と。誘。ひ。去。り。素。藤
 們。を。獄。舎。送。り。遣。り。妙。椿。裡。の。古。殿。は。皮。を。遣。と。燻。番。と。と。隊。の。兵。衆。吟。咄。と。親。兵。衛。と。共
 侶。當。坐。の。勇。士。相。俦。と。郭。内。巡。檢。を。那。地。道。の。邊。に。來。り。畢。竟。清。澄。們。を。追。て
 活。路。の。奇。を。尋。て。又。甚。麼。多。話。説。あり。と。開。き。卷。を。更。て。且。下。回。解。分。る。を。聽。ね。り。

南總里見八犬傳第九輯卷之十六終

